

( 続紙 1 )

京都大学	博士 (地域研究)	氏名	神代 ちひろ
論文題目	現代アフリカ農村における女性住民組織と生活実践 —ブルキナファソ北西部の開発プロジェクトとマイクロファイナンスを めぐる事例から—		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、開発プロジェクトの活動やマイクロファイナンスの利用が盛んにおこなわれている現代アフリカ農村において、女性住民組織の活動が、村びとの生活のなかでどのような役割を果たしているのかを、組織レベルと個人レベルの分析により明らかにしたものである。</p> <p>第1章では、本研究の背景と目的を示した。開発プロジェクトの受け皿となる「住民組織」に関する先行研究では、開発プロジェクトの成果に関連づけ、組織単位でその活動を評価する傾向が強い。それに対し本研究では、組織の分析に加え、組織の会員個々人の生活実践から、組織活動や開発プロジェクトを分析する重要性を論じた。</p> <p>第2章では、ブルキナファソ北西部の調査村と農耕民ブワについて概説した。調査村ではこれまで、海外等の複数の開発援助機関のプロジェクトが継続しておこなわれ、公共施設などが整備されてきたことを述べた。</p> <p>第3章では、ブルキナファソとブワの住民組織の概要、ならびに調査村における住民組織の変遷と各組織の活動について分析した。調査村では伝統的な組織が存在し、村の生活や農作業を支えてきたことを指摘した。</p> <p>第4章では、開発プロジェクトをきっかけに形成された女性住民組織「ハナーミ」の活動の変遷を詳述した。ハナーミは、複数のマイクロファイナンス機関からマイクロクレジット (少額の貸付金、以下クレジット) を借り入れただけでなく、会員の経済活動に適した返済期間や利子率で貸し付けるよう各機関に交渉し、条件を変更させた。また、ハナーミがそれらの経験を通じ、技術、知識、自信を蓄積し、外部組織に頼らない自己資金による独自の金融活動を創り出したことを明らかにした。</p> <p>第5章では、クレジット利用について個人に焦点を当てて分析した。マイクロファイナンス機関は、女性の事業拡大や生活向上につなげることを意図して貸付をおこなう。しかしハナーミの会員は、生活必需品とはいええない家財道具や、本来なら夫が負担すべき消費材の購入にもクレジットを用いていた。彼女たちはそれにより精神的な充足を得たり、家計を安定させたりしていたことを指摘した。</p> <p>第6章では、ハナーミの会員がおこなうクレジットの「又貸し」や、返済できないときに頼る相手に着目し、クレジットをめぐる社会関係を明らかにした。会員の又貸し相手は夫や息子などが多く、返済ができないときに頼る相手は、夫あるいはハナーミのクレジット利用経験者に限定されていた。ここでみられる又貸しは、男性親族に</p>			

「なにかをしてあげたい」という女性の想いを実現したり、夫婦で家計を支え合ったりする手段となっていることを論じた。

第7章では、ハナーミが複数の開発援助の資金を活用し、野菜作り用の菜園の設備を整えていった過程を示した。多くの会員が、非会員である女性親族に自分のプロット（作業場所）を貸し、井戸の水が不足する問題が起こった。それに対しハナーミは、会員の優先権を守りながらも、女性親族を受け入れるための新たなルールを作ったことを明らかにした。

第8章では、個々の会員がハナーミの菜園をどのように利用しているのかを詳述した。菜園は女性たちにとって、おしゃべりや情報交換、手助けを通じて人間関係を醸成する場、野菜作りへのモチベーションを高め合う場となっていることを示した。

第9章（結論）では、ハナーミが、組織外部に対しては資源の獲得や交渉をおこなう役割、組織内部に対してはルールを作り資源を管理する役割を担い、開発援助機関が期待する主体的な組織活動を展開していたことを明らかにした。一方、会員個々人は外部機関の意図に反し、本来なら自分だけで利用すべき資源を親族に分けて利用していた。それにより相手とのゆるやかな互酬的關係さえ生まれていたことを指摘した。

(論文審査の結果の要旨)

現代のアフリカ農村では、多くの開発プロジェクトが実施され、マイクロファイナンスなどを通じて多額の資金が国内外から流れ込んでいる。本論文は、そのような複数の開発プロジェクトが日常的に進行するブルキナファソの農村において、プロジェクトの受け皿として創設された一つの女性住民組織であるハナーミを対象として取り上げ、その活動と役割を、組織レベルと個人（会員）レベルから分析している。ハナーミとその会員は、多数の開発プロジェクトに参加し、そこから得た資源（クレジット・菜園の設備等）や技術を受け入れ、活用し、生活に取り込んでいる。このような女性たちの生活実践を、長期のフィールドワークで得た資料を基に、詳細に記述していることが本論文の特徴である。

本論文の学術的貢献として、以下の3点を挙げるができる。

まず、開発プロジェクトの受け皿として作られた一つの女性住民組織の活動を、創設から今日まで通時的に考察したことである。開発プロジェクトの終了と同時に解散する住民組織もあるなかで、ハナーミは他の組織とは異なり、長年にわたり複数の開発プロジェクトを受け入れ、マイクロファイナンスの返済を続けるなど、活発に活動してきた。本論文ではその理由を、組織と会員それぞれに焦点を当てて分析している。ハナーミは、クレジット利用条件に対する会員の不満を解消するため外部機関と交渉をおこなうなど、会員の側にたった組織運営に努めてきた。個々の会員も、クレジットの返済期限を守り、いざというときの返済手段を講じるなど、円滑な組織運営に協力していた。このように本論文は、組織と個人の双方の努力により、住民組織の活動が長年にわたり維持されてきたことを説得的に論じている。

二つ目は、マイクロファイナンス研究への寄与である。本論文は、ハナーミが、外部のマイクロファイナンス機関から貸付を繰り返し受けるなか、当該社会において「お手本」となる組織として認知され、組織運営に自信をつけていったこと、また、マイクロファイナンスに関する経験や知識を蓄積し、試行錯誤を繰り返しながら、独自の金融活動を創り出したことを明らかにしている。このような、アフリカ農村における女性住民組織のエンパワーメントの過程を詳述した研究はこれまでにほとんどなく、これ自体が貴重な報告となっている。また、夫・息子などへのクレジットの「又貸し」に関して、女性の意思に反した男性によるクレジットの流用などではなく、女性たちが貸付相手や貸付金額を慎重に見極めながら、主体的におこなっていることを明らかにしている。このように本論文は、住民組織がマイクロファイナンス機関の想定・期待とは必ずしも一致しない方法でクレジットを巧みに運用している実態を明らかにしており、マイクロファイナンス研究への大きな貢献となっている。

三つ目は、さきの論点とも重なるが、女性たちによる資源の「分かち合い」とその意

義を明らかにしたことである。本論文は、開発プロジェクトと住民組織に焦点を当てつつ、農村女性の生活全般についても分析している。女性たちが開発プロジェクトで得た資源を親族に分けるプロセスや、それが社会関係の維持につながっていることなどが、女性たちの農村生活に関する厚い記述によって説得的に示されている。また本論文は、開発プロジェクトによって農村社会にもたらされる負の影響（たとえば会員と非会員との間に格差や軋轢が生じることなど）が、女性たちによるこのような「分かち合い」によって緩和されていることも示唆している。

以上のように、本研究は、長期のフィールドワークにおいて収集した詳細なデータをもとに、マイクロファイナンス研究、アフリカ農村女性の研究に新たな知見を与える優れた研究として高く評価できる。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、2020年2月3日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。